

<b>発表タイトル</b>	「生活と芸術」美と芸術による人間性の獲得 —白洋社美術展覧会を事例として—
<b>発表者所属名</b>	国際日本研究専攻
<b>発表者氏名</b>	九里文子

### 目的

イギリスの社会運動家ウィリアム・モリスたちが唱えた「芸術の生活化、生活の芸術化」は、生活の潤いや、文化的向上を望む声が高まった日本に紹介され、さまざまな社会運動として波及した。大正期に「生活と芸術」は、短歌、小説、詩、評論だけでなく、演劇、音楽、美術、建築等、幅広い分野で、それぞれの主張を述べるためのフレーズとして用いられている。この「芸術の生活化」が「民衆芸術」や「農民美術」と同じように日本の近代化における一つの思想であったと捉え、富山県下新川郡泊町(現朝日町)の白洋社美術展覧会を事例として、歴史的、思想的にその具体相を明らかにすることがこの研究の目的である。

### 経過

白洋社美術展覧会は、「生活を芸術化する」をスローガンとして、民衆の生活と芸術を密接にすることを主張し、運動を展開している。「人間中心」の西洋の考えに基づき、人間らしく生きるために、美と芸術による人間性の獲得を目指している。その実践では、新しき芸術思潮、ひとつ目は後期印象派などの表現上の刷新運動、二つ目は、芸術の社会化を基盤とし、美術展覧会をそのための装置として考えて運動を実践している。美術の専門家と素人が一堂に作品を展示するという、今日では奇抜に思えるアイディアの美術展覧会は、人間が人間らしく生きるための人格形成を目指して、欧米から紹介された精神医学や心理学などの科学的な知識を駆使して戦略的に運営されていた。

### 今後の課題

竹久夢二展をめぐる彼の活動の内容や、白洋社の周辺に位置した「引退」後の相馬御風らによって、「生活と芸術」が如何に語られ、実践されたかを明らかにする。また、白洋社美術展覧会の展開に関係する、芸術や精神医学や心理学の思想的な背景を明らかにする。



上 白洋社美術展覧会会場にて同人たち  
右 北陸めざまし新聞(1923年.8月2日号)

